

疫学情報 2019年12月5日分

<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO52552140U9A121C1CR8000/> 日本経済新聞社

社会・暮らし

2019/11/24 16:49

鼻に噴射でインフル感染予防 国産ワクチン承認申請へ

鼻にスプレーするだけで、インフルエンザの感染を防ぐ国産の経鼻ワクチンを大阪府吹田市の阪大微生物病研究会が24日までに開発した。人に予防接種して安全性と有効性を調べる治験が今年7月に終わり、近く国へ承認申請する方針。従来の注射に比べて高い効果が期待できるという。

経鼻ワクチンはすでに米国で広く使われているが、国産品は初。承認されれば、数年後に痛みを伴う注射をしなくても、インフルエンザを予防できる時代が来る可能性がある。

申請するのは、病原性をなくしたウイルスを利用した不活化ワクチン。細いスプレー容器に入ったワクチンを鼻に差し込んで噴射する。国立感染症研究所で先行して行われた臨床試験では、複数回投与すると、ウイルスを攻撃する抗体が働くことが確認できた。

従来の注射するワクチンは体内に入ったウイルスによる重症化を防ぐのが目的で、感染は食い止められなかった。これに対し経鼻ワクチンは、ウイルスが体に入る際に通る気道の粘膜のバリアー機能を高めるため、感染防御ができると考えられている。また流行したウイルスのタイプが予想と違った場合でも効きやすいとの研究結果もある。

米国では毒性を弱めたウイルスを鼻に噴射する生ワクチン「フルミスト」が販売されている。ただ、発熱などの副作用が出る場合もあり、乳幼児や高齢者は使えない。日本での使用は、製薬大手の第一三共が2016年6月に国に承認申請し、審査中となっている。

これに比べて阪大微研が開発したものは、不活化ワクチンのため副作用の恐れが少ない。国立感染症研究所インフルエンザウイルス研究センターの長谷川秀樹センター長は「痛みがなく簡便。お年寄りや乳幼児の使用にも向いている」と話している。〔共同〕

http://www.ims.u-tokyo.ac.jp/imsut/jp/research/papers/post_130.php 発表論文解説

東京大学医科学研究所ウイルス感染分野 河岡教授ら

Nature Microbiology 11月25日オンライン版 DOI番号: 10.1038/s41564-019-0609-0

患者から分離されたゾフルーザ耐性インフルエンザウイルスの特性を解明

東京大学医科学研究所ウイルス感染分野の河岡教授らは、インフルエンザ患者からバロキサビル・マルボキシル（商品名：ゾフルーザ）に対して耐性を示すウイルスを分離し、その基礎性状を明らかにしました。

本研究グループは、2018/2019インフルエンザ流行シーズンに国内の医療機関を受診したA型インフルエンザ患者から採取した検体を入手し、検体中のウイルス遺伝子を解析しました。その結果、ゾフルーザを服用した12歳未満のA型インフルエンザ患者において、ゾフルーザ耐性ウイルスが高い頻度で出現することを明らかにしました。さらに薬剤未投与のA型インフルエンザ小児患者からも耐性ウイルスを検出しました。これは耐性ウイルスが感染者か

ら周囲の人々に感染伝播した可能性が高いことを示しています。また、本研究グループは患者から分離した耐性ウイルスの性状をインフルエンザのモデル動物を用いて分析し、ゾフルーザ感受性ウイルスと比較しました。その結果、ゾフルーザ耐性ウイルスの哺乳類における増殖性と病原性は感受性ウイルスと同等であることが明らかになりました。さらに、これらの耐性ウイルスは哺乳類間を効率よく空気伝播することもわかりました。これらの成績はゾフルーザ耐性ウイルスが今後人から人へ広がる可能性があることを示唆しています。

本研究成果は、医療現場における適切な抗インフルエンザ薬の選択に役立つだけでなく、耐性ウイルスのリスク評価など行政機関が今後のインフルエンザ対策計画を策定、実施する上で、重要な情報となります。

本研究成果は、2019年11月25日英国科学雑誌「Nature Microbiology」のオンライン速報版で公開されました。

なお本研究は、東京大学、国立感染症研究所、米国ウィスコンシン大学、米国マウントサイナイ医科大学が共同で行ったものです。

<https://www.mhlw.go.jp/content/10900000/000571979.pdf>

鹿児島市における B ウイルス病患者の発生について

健感発 1128 第 1 号
令和元年 11 月 28 日

都道府県
各 保健所設置市 衛生主管部（局） 御中
特 別 区

厚生労働省健康局結核感染症課長
（ 公 印 省 略 ）

鹿児島市における B ウイルス病患者の発生について

日頃から感染症対策への御協力を賜り厚くお礼申し上げます。

B ウイルス病（四類感染症）はマカク属のサル（アカゲザル、カニクイザル、ニホンザル、タイワンザル等）との直接的な接触（咬傷、擦過傷）により感染するとされています。

今般、鹿児島市内で、実験サル取扱施設の従事者が B ウイルス病を発症した事例がありましたので情報提供します（別紙 1）。現在、鹿児島市により疫学調査が行われているところですが、従事している実験サル取扱施設内での感染が推定されています。

本病の感染予防に関しては、マカク属のサルによる咬傷、擦過やサルに使用した注射針の針刺し、培養に使用したガラス器具等による外傷を防ぐことが重要となりますので、貴職におかれましても、動物取扱業者等への感染予防のための周知に改めてご配慮いただきますようお願いいたします。また、貴管内の医療機関等の関係者に対して本事例について情報提供いただき、マカク属のサルとの接触歴のある患者を診察する際には、必要に応じて B ウイルス病を念頭においた診療を行っていただき、感染が疑われる事例については、速やかに保健所

への情報提供を行っていただくよう、協力要請をお願いします。

なお、本事案については、公益社団法人日本医師会及び公益社団法人日本獣医師会等の関係団体に対しても当課から情報提供していることを申し添えます。

(参考)

■厚生労働省ホームページ

B ウイルス病について

https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/000130367_00001.html

B ウイルス病に関する Q&A

<https://www.mhlw.go.jp/content/10900000/000571901.pdf>

■国立感染症研究所ホームページ

B ウイルス病とは

<https://www.niid.go.jp/niid/ja/kansennohanashi/470-b-virus-info.html>

別紙

提供日 令和元年 11 月 28 日 (木)

■表題 B ウイルス病発生の届出について

■取材対応者

鹿児島市保健所 保健予防課 課長 吉住 嘉代子

TEL803-7023 (内線) 2851 別館 3階

【担当：主査 福永 千鶴 TEL803-7023 (内線) 2864】

B ウイルス病発生の届出について

鹿児島市内の医療機関から鹿児島市保健所にB ウイルス病（四類感染症）の発生の届出がありました。

B ウイルス病は実験動物施設で実験サルとの直接的接触等で感染するとされており、空気感染はしません。実験動物を扱う施設内で発生した感染症です。

1 患者の情報 実験動物施設従事者 1名（現在加療中）

2 経過

2月 頭痛、発熱等により患者が医療機関を受診。

11月上旬 医療機関から発生届が提出され、内容を精査し、厚生労働省に報告・相談。厚生労働省・国立感染症研究所と三者で協議を行い、国立感染症研究所へ市が検査を依頼。

11月21日、22日 厚生労働省、国立感染症研究所及び本市保健所の合同による実験動物施設への調査を実施。

11月27日 国立感染症研究所からの検査結果を市が受け取り当該医療機関に送付。

11月27日 当該医療機関からの発生届を受理。

11月27日 厚生労働省に対してB ウイルス病の発生を報告。

https://www.snbl.co.jp/cat_important/4702/

新日本科学

B ウィルスに関するお知らせ

弊社 安全性研究所（鹿児島）において、動物実験に従事する技術員が B ウィルス（以下、BV）に感染したことが判明し、現在、加療中であります。詳細は、個人情報に関わるため控えさせていただきます。BV 感染場所はサル実験施設内と推定されます。

自然界にいるマカク属サルは、かなり高い比率で BV を保有しており、不顕性感染（感染はしているが、症状は出ない状態）がほとんどです。ヒトは、サルに咬まれるか、引つかかれるか、またはサルの生体試料などに直接接触しない限り感染しません。今回のケースでも何らかの形でサル又はサルの生体材料との直接接触があったことが原因と考えられます。一方、通常、ヒトからヒトへは感染しないと言われており、一般の方々が BV 感染をご心配する必要はありません。これまでに、ヒトへの BV 感染の報告は、アメリカのサル実験施設において、過去に約 50 例が報告されております。近年、弊社ではカンボジアと中国において、BV 陰性のサル繁殖に成功しており、現在、弊社が国内で飼育する殆どのサルが BV 陰性です。BV が完全にウィルスフリーとなるまで、もう少しという段階にまで至っております。また、弊社のサル実験施設では、厳重な感染予防対策を講じており、PMDA の GLP 調査、農林水産省の霊長類検疫調査、国際認証機関（AAALAC International）による認定を定期的に受けている他、動物の取扱いに関しては、厳格な手順を定めて、これに従って実施しており、社員教育としても徹底した研修を継続的に行っております。今後、本件を踏まえて、手順を見直し、更なる厳重な管理体制を敷き、行政機関と連携をとり再発防止に全力を尽くして参ります。

弊社は、「創薬と医療技術の向上を支援し、人類を苦痛から解放すること」を使命として、企業理念の中核に掲げており、今後もこの使命を達成するために精進して行きたいと存じます。なお、本件は業績に直接影響はしませんが、影響があった場合には速やかに開示します。
備考)

PMDA の GLP 調査：独立行政法人医薬品医療機器総合機構（Pharmaceuticals and Medical Devices Agency）は、GLP 省令に基づいて、医薬品などの安全性に関する非臨床試験を実施する試験施設に対して GLP 適合状況について当該施設を訪問して調査し、その施設の評価を行うとともに、必要に応じ試験施設に対して指導及び助言を行います。

農林水産省の霊長類検疫調査：海外から輸入されるサルは、法令に従い、定められた係留施設で検疫を実施します。サルが輸入されるごとに農林水産省の検疫官が施設に訪問して、動物の異常の有無、動物検疫所からの指示事項や手順書の遵守状況、検査結果などを確認し、検疫が適正に実施されているかを調査します。国際認証機関（AAALAC International）の認定：国際実験動物ケア評価認証協会（The Association for Assessment and Accreditation of Laboratory Animal Care International）は、任意の評価認証プログラムを通じて、科学における動物の人道的取扱いを推進している民間の非政府系団体で、施設の整備状況、動物の取扱い手順などを調査して施設に認証を出します。

https://jata.or.jp/data/tp/000000/01/0000000120/img2_1.jpg

公益財団法人 結核予防会 結核研究所

対策支援部からのお知らせ

～世界結核デー記念～結核対策推進セミナーのお知らせ

「～世界結核デー記念～国際結核セミナー」と「全国結核対策推進会議」は会場を変え、新たに「～世界結核デー記念～結核対策推進セミナー」として1日のプログラムで開催することになりました。

テーマ：低まん延化を目前にひかえた結核対策

日時：令和2年（2020年）2月28日（金）13時00分～18時00分（予定）

会場：学術総合センター内 一橋大学一橋講堂

参加費：7,000円（税込, 事前振込）

申込開始：1月初旬予定



今年度、日本が「平成」から「令和」に変わりました。
このシンポジウムも、会場が変わり、新たなスタートを切ります。
今まで以上に、ご来場いただく皆様のためになる、明日から活かしていける内容とする予定です。
万障お繰り合わせの上、是非ご来場くださいませ！

- 日時：令和2年2月28日(金) 13:00～18:00予定
- 会場：学術総合センター内 一橋大学一橋講堂
- 参加費：7,000円(税込) ※事前振込みをお願いしております。



東京メトロ半蔵門線、都営三田線、都営新宿線
神保町駅(A9出口) 徒歩4分
東京メトロ東西線 竹橋駅(1b出口) 徒歩4分

テーマ：低まん延化を目前にひかえた結核対策

- ①厚生労働省健康局結核感染症課より結核対策最新情報
- ②本邦におけるMDR事情とMDRの最新情報
- ③QFTプラス～何が変わったか～
- ④潜在性結核感染症の新しい治療
- ⑤感染症病床における結核管理と地域医療連携のための指針

ワークショップ：
初學者でもわかる積極的分子疫学調査
～どう活用するか～

地方衛生研究所、県保健所、市保健所、医療機関、それぞれの立場から、手引きに関する要望や調査の限界、今後の活用方法などについて、お話いただきます。

※開催内容・申込み等の詳細につきましては、順次ホームページへ掲載いたします。



https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/shokuhin/syokuchu/05107.html#q13

厚生労働省 医薬・生活衛生局 食品監視安全課

アニサキス食中毒に関するQ&A（令和元年11月1日最終改正）

Q13. 平成30年にアニサキス食中毒が多く報告された原因は何ですか？

A13.

平成30年にアニサキス食中毒が多く報告された原因を調査するため、平成30年度に「カツオの生食を原因とするアニサキス食中毒の発生要因の調査と予防対策の確立のための研究について」（概要）を実施しました。これまでカツオによるアニサキス食中毒の報告は少数でしたが、調査により、平成30年に漁獲されたカツオには、例年よりも海水温が高い状況が続き、海水温が例年並みに低下しなかったこと、漁獲海域が例年とは異なっていたことなどにより、多くのアニサキスが寄生したことが、平成30年の食中毒報告件数の増加の要因となったと推測されています。

令和元年10月23日時点（速報値）では、アニサキス食中毒の報告数は142件であり、10月末までに425件の報告があった平成30年と比較すると大幅に減少し、例年並みの報告数となっていますが、引き続きQA.8に示す予防対策を行っていくことが有効です。

<https://www.mhlw.go.jp/content/11130500/000560242.pdf>

カツオの生食を原因とするアニサキス食中毒の発生要因の調査と予防策の確立のための研究について（概要）

（公財）目黒寄生虫館 館長 小川 和夫

東京都健康安全研究センター 微生物部食品微生物研究科長 鈴木 淳

国立感染症研究所 寄生動物部 主任研究官 杉山 広